

採用された。松堂は本名栄二。明治十五年生まれ。同三十四年二月から六月まで共立美術学館で学び、同年九月本校に入学。傍ら川合玉堂に師事し、同三十九年日本撰科を卒業した。翌四十年の東京勸業博覧会で三等銅賞受賞。また、文展には第一回より出品し、第八回(大正三年)、第九回(同四年)と続けて三等賞を受賞。その業績が認められて本校に採用された。以後、本校助教(大正八年)、同教授(同十四年)、図画師範科主任(昭和三年〜同七年退官)となり、一方、帝展審査委員(大正十四年〜昭和三年)もつとめた。なお、松堂は平田東助伯爵の長男で、大正十四年に襲爵するが、大正三年の文展で彼が受賞したときは、『二六新報』(同年十一月二十二日)が平田父子の顔写真と受賞作「小鳥の声」の写真を掲げ、「長閑の参謀長」の総領息子である「新進の華胄画家」を大々的に紹介した。

⑤ 竹内久一死去

大正五年九月二十四日、彫刻科教授竹内久一が死去した。葬儀は二十七日に谷中斎場で行われた。『東京美術学校校友会月報』第十五巻第六号には屋代敏三による追悼記事と略歴、肖像写真、最近作木彫久米舞の写真が掲載されている。追悼記事は次のとおりである。

竹内先生の卒去

(晁江記)

大正五年九月二十四日、東京美術学校教授帝室技藝員従四位勲四等竹内久一先生卒去せらる。洵に悲痛の情に堪へざるなり。先生は本校の開校(明治二十二年二月)に先ち明治二十一年四月本校に聘せられてより二十有九年、職を本校に奉じ、内にありては孜

々として後進を薰陶し、外にありては諸會の審査官、鑑査官、委員等として、美術界のために盡されたる功勞の著大なることは、何人も知る所にして今更喋々を要せざるなり。先生の病に罹りたるは本年九月初旬なりしが、中旬に迫りて漸く重く、遂に起つ能はざるに至れり。享年六十。病革るや、特旨を以て位一級を進め、従四位に叙せられ、訃の聞ゆるや、祭棗料を下賜せらる。餘榮ありといふべし。先生は生粹の江戸ッ子にして、安政四年七月九日、江戸淺草谷中天王門前山川町に生れ、洒落にして奇行に富めり。初め堀内龍仙、川本洲樂の門に入りて象牙彫刻を學びたりしが、明治十三年觀古美術會に於て奈良興福寺の古像を見て大に感ずる所あり。木材彫刻を以て身を立てんと決意し、其後再三奈良に遊びて研鑽^{〔馳カ〕}怠らず、遂に擢られて本校に聘せられ、木彫の鉦匠として令名を聘せたり。

竹内久一は旧名を兼五郎といい、久遠と号した。岡倉覚三に拔擢されて本校開校準備に携わり、神武天皇、伎芸天、日蓮上人銅像木型その他の木彫大作を制作し、木彫の復興につとめた。岡倉校長退陣後、彫刻科の方針が変わり、塑造が中心となつて行つた中ではその活躍の範囲は狭められたが、高村光雲とともに老大家としてなお彫刻教育に尽くし、文展や博覧會の審査官をもつとめた。制作歴の概要については吉田千鶴子著「竹内久一レポート」(『東京芸術大学美術学部紀要』第十六号。昭和五十六年)を参照されたい。

⑥ 前田香雪死去

もと囑託前田香雪の死去を『東京美術学校校友会月報』第十五巻